

〔新収品紹介〕

さくげんしゅうりょうざん きんざん じず
策彦周良賛「金山寺図」

—紙本墨画 39.5×47.3cm 室町時代—

当館では、平成6年の雪舟展のあと、室町時代末期の禅僧、策彦周良(1501~79)が着賛した「金山寺図」一幅を購入しました。

この画は、中国鎮江府の揚子江に浮かぶ小島で、かつて雪舟も参詣した名刹金山寺の景観を描いたもの。稚拙な水墨描写で、素人の筆になるものと思われまゝ。描いた人の落款や印章はありません。

さて、策彦は、丹波の人。俗称は井上氏、諱は周良、号は謙齋、恰齋、亀陰と称しました。天竜寺の心翁等安の法を継ぎ、同寺妙智院第三世となりました。漢字や詩文の才に長じたことで有名です。

策彦は、天文8年(1539)4月、遣明正使・願賢碩嗣のもとで副使をつとめ入明し(策彦39歳)、同9年7月に帰国しました《初渡》。二度目の入明は、天文17年(1548)5月で、このときは正使をつとめ(策彦48歳)、同19年6月に帰国しました《再度》。両度、寧波に上陸し、大運河を旅し、北京に趣き、明の皇帝に謁し、明の文人たちとも交わりました。帰国後、周防の大守・大内義隆や織田信長や武田信玄らの厚い帰依を受け、妙智院において79歳で寂しました。

画賛は、「再登金山」と題し、「翰苑遺芳」印を捺し、「金山古寺記吾

会、一葉扁舟両度登、瓦鼎煎茶談到暮、眼青頭白去年僧」、「謙齋袈裟策彦、大明再渡之后、書焉」と墨書し、「策彦」印を捺しています。この款記から、《再渡》の後、つまり天文19年(1550)6月以降に、着賛されたものであることがわかります。この七言絶句は、最初の入明の時、北京からの帰路、天文9年8月5日に金山寺に再び登った時の作です(妙智院蔵『策彦和尚入明記・初渡集』)。

最初に金山寺に遊んだのは、北京への往路の際、天文8年12月3日の日。策彦は、眼にした建物や寺額や対聯などを克明に文字で記録しています(『初渡集』)。それによれば、呑海亭の下には「塔婆の跡」があり(当時、塔の建物はなかった)、また、山頂の留雲亭の前に「刹竿」(寺の旗竿)があったと記録しています。本図には、塔の建物はなく、「刹竿」が明確に描かれています。としますと、この画は、金山寺のありのままを描いているように思われます。一方、雪舟筆の「金山寺図」には、両塔が堂々と立ち、刹竿はなく、策彦賛の画とは異なっています。雪舟画は、はたして金山寺の現実の景観を見て描いたものなのか、という疑問がおこります。(林進)

金山寺図 策彦周良賛



金山寺図の部分(山頂の刹竿)

